ささえる力 Power

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

尽くす

震災を乗り越え 霞ヶ浦の恵みを未来へ

琵琶湖に次ぐ、日本第２位の湖面積を誇る霞ヶ浦。そんな霞ヶ浦の周辺は低平地が多く、古くから洪水や塩害に悩まされてきた。このような霞ヶ浦周辺の水を治めるとともに、増大する水需要への対策として始まったのが霞ヶ浦開発事業だ。

しかし、平成 23 年 3 月。未曾有の震災はこの地域にも猛威をふるい、被災した霞ヶ浦開発施設の復旧が、機構にとって急務となった。そんな状況下において、施設の復旧を任された男が玉造管理所の谷だった。今回は、震災復旧に携わった谷の、２年間にわたる奮闘を紹介する。

霞ヶ浦開発施設は、平成８年３月に完成して以来、地域を洪水や塩害から守り、茨城県をはじめとする首都圏への農業用水、水道用水、工業用水の供給を行っています。

Profile

利根川下流総合管理所　玉造管理所　所長

谷　剛 *Tsuyoshi Tani*

昭和59年4月水資源開発公団（現水資源機構）入社。最初の赴任地である阿木川ダム建設所でダムの設計や工事監督に携わる。出向先である（財）ダム水源地環境整備センター（現水源地環境整備センター）、また中部支社や本社環境室では、環境分野の業務に従事。その後、武蔵水路改築調査所調査設計課長や琵琶湖開発総合管理所管理課長などを歴任し、平成23年4月より現職。

その時

琵琶湖に次ぐ、日本第２位の湖面積を誇る霞ヶ浦。その霞ヶ浦の開発や管理を行っているのが利根川下流総合管理所で、玉造管理所はその出先の事務所だ。谷がこの事務所の所長としての赴任の内示を受けたのは、平成 23 年 3 月 10 日のことだった。

「当時、私は琵琶湖開発総合管理所の管理課長だったこともあり、内示を受けたときには、同じ湖沼管理という意味で、霞ヶ浦には馴染みを感じました。しかし、霞ヶ浦は一度も訪れたことはなく、『どんなところなのかな』というのが、正直な感想でした。」

その翌日、マグニチュード 9.0 の巨大地震が東日本を襲い、各地に甚大な被害をもたらした。谷の新たな赴任先である霞ヶ浦の施設も被災し、現場事務所は、未曾有の事態への対応に追われることとなった。

「この知らせを聞いたとき、翌月から赴任するにあたって、正直なところ不安感が募りました。現場事務所は必死な対応に追われているため、事務引継もできません。現地では強い余震が続いており、関東に残

総管本部とのテレビ会議（当時）。写真右下が谷。
当時は、覚悟を示すための丸刈りであった。

してきた家族とも連絡がとれない状況でした。」

それでも、体一つで初めて霞ヶ浦の地に降り立ったとき、谷は思ったという。

「不安もあるが、これが自分の『運命』なんだ。やり抜こう。」谷の抱いていた不安感は、使命感へと変わった。

それから

霞ヶ浦の湖岸堤の全長 251 キロメートルの内、機構が管理している区間は約 78 キロメートル。その内の約 19 キロメートルの区間が、震災による亀裂や液状化により大きな被災を受けた。

「最初の半年の仕事は、被災した湖岸堤の応急対策工事でした。霞ヶ浦開発施設が正常に役割を果たすために、一刻も早い応急復旧が必要だったのです。これらの工事は震災直後の混乱状態の中、地元住民の方々へのご説明を満足に行えないままでの着工となってしまいました。」

完成した湖岸堤を歩きながら谷は語る。

「それにもかかわらず、地元住民の方々は『地元のための工事なのだから』と、我々の工事に快くご協力下さいました。ですから、我々としても、工事を実施するにあたっては、地元住民の方々の生活への配慮を最優先とし、地域に喜ばれる災害復旧とするよう心がけました。」

谷は続ける。

「加えて、地元住民の方々は、震災によって心身ともに疲弊しておりました。ですので、地元住民の方々と接する際には、思いやりの気持ちを持って接するよう心がけました。そして、我々の工事受注者の作業員の方々は、ほとんどが地元の方です。地元説明や工事監督で現場に行くときは、『一緒に復興しているんだ』という気持ちを常に持って地元住民や作業員の方々に接し、業務遂行に誠心誠意尽くしました。」

そして谷は、傾いた電柱を指さす。

「震災の傷はまだ残っています。しかし、あれから 2 年が経過し、この地域にも平穏で落ち着いた状況が戻ってきました。それとともに、自分の今の業務量も、通常の量に戻ってきました。」

そして今、これから

震災から 2 年後の平成 25 年 3 月、少ない人数で広範囲の工区をカバーする難しい工事ではあったが、被災した霞ヶ浦開発施設の災害復旧は、人的事故を一件も起こすことなく無事終了した。

「災害復旧が完了したことで、引き続き、霞ヶ浦開発施設はその役割を果たしていくことができます。機構は様々な施設を管理していますが、ダムの管理と異なり、湖沼の管理はその恩恵を皆さんが感じにくいものだと思っています。しかし、いざという時に、その懐の深さを発揮するのが湖沼の水です。そんな大事な水を預かる施設が、実は関東にもあるんだということを皆さんにもっと知っていただければありがたいです。」

これまでの業務経験に加え、今回の災害復旧に携わった経験を活かし、今後は海外の技術者と一緒に仕事を行えるような立場で、霞ヶ浦での経験を含め機構の技術を積極的に情報発信していきたいと考える谷。大きな仕事を成し遂げた今、彼の目は、次の目標へと向けられている。

旅行が大好きな谷所長。愛読書は「時刻表」とのこと。「昔は青春 18 切符でがんばっていました。若かったなぁ…」としみじみ。
誠実な人柄がにじみでているような方でした。